

業務プロセスを重視したシステム間接続によるSTP化の推進

村上洋之

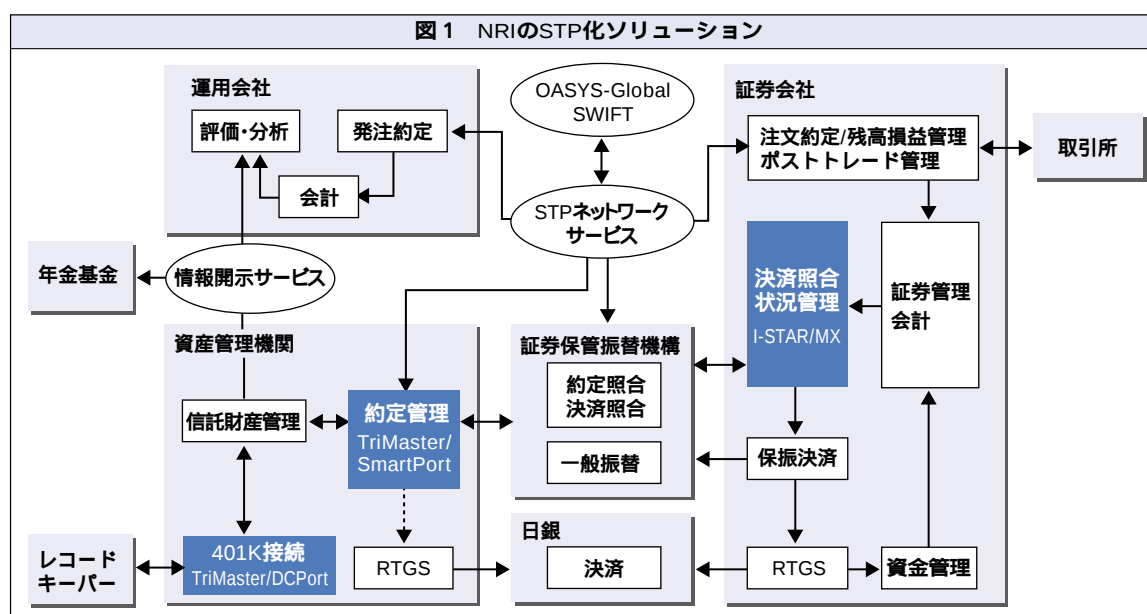
STP（約定～決済の全電子処理）化の実現が期待され、また課題とされるようになって数年が経過し、各金融機関の対応状況が明らかになってきた。そこには、期待されるほどにはSTP化が進んでいない現状もみえる。本稿では、業務フローの管理・統合機能を重視したシステム間接続の必要性について提言し、STP化の進め方について考察する。

STP化の進捗状況

STP化の実現に向けて、数年前よりDVP（証券・資金の同時決済）化、日銀RTGS（即時グロス決済）化など、証券・金融業界ではSTP化への対応が進められてきた。しかし、米国でT+1（取引日翌日決済）の実施が先送りされるなどSTP化の取り組みが見直され、日本でもSTP化の費用対効果があらためて検討されるようになってきている。各企業では、STP化に向けた大規模なシステム再構築を行うより、特定業務について既存社内

システムと特定外部システムとを接続することから順次対応しているというのが現在の状況である。

STP化の最終的な目標は、社内外の枠を越えて多くのシステムが相互にデータ接続でき、業務フロー全体にわたって一貫した電子化・システム化を行うことである。その目標には、1対1、1対n、n対nのシステム間接続を順次、実現することによって到達することになる。各金融機関の現在のSTP化の状況は、1対1および1対nのシステム間接続から着実に実施している段階と言える。



システム基盤主導のSTP化の現状

EAI（企業アプリケーション統合）ソフトウェアが登場したとき、これはSTP化を実現するソリューションとして有望であると期待された。しかし最近では、この見方は疑問視されるようになってきている。

EAIソフトウェアは、アダプタというインタフェースの仕組みによって企業全体のさまざまなシステムを統合する。金融機関にとって重要な、SWIFT（国際銀行間通信協会）などの金融プロトコル、HTTP（Webページの転送プロトコル）、FTP（ファイル転送プロトコル）、MQ（メッセージキューイング）といった通信プロトコルに対しても、多くのアダプタによって対応する。

しかし、ビジネスプロセスの統合やデータ電子化にともなう周辺業務の再編が必要となり、大きな投資を伴う。しかも、多種多様なシステムを統合しなければ、投資に見合った効果が得られない。このため、投資効果が不十分であると評価されるケースがみられる。最近のEAIソフトウェアでは、対応アダプタ範囲を縮小したり、さまざまな業務プロセスに対応する機能をもつような動きが出ている。

業務プロセス重視のシステム間接続

こうしたことから、将来的には多様なアダプタ機能によって多種多様なシステムの統合を図るとしても、その前に業務プロセスを重

視してシステム間接続を進めていくことが、STP化実現の有力な方法と考えられる。

NRI（野村総合研究所）では、さまざまな業務プロセスに対応することを目的としたシステム間接続パッケージとしてTriMaster/SmartPortを提供している。図1はNRIのSTP化ソリューションの概要で、濃い色を付けた部分でSmartPortが利用されている。

SmartPortは汎用開発機能（チェック、フォーマット変換、ワークフロー、照合ルールを柔軟に設定・開発）、ステータス管理機能（処理状況を管理）、汎用ブラウジング機能（データを業務ごとに一覧し、詳細画面で照会・更新する）を提供する。

たとえば保振約定照合・決済照合システムとの接続を担うI-STAR/MXでは、メッセージを取り消す際に取消可能かをチェックするなど、業務プロセスを考慮したさまざまなステータス管理機能を提供している。また、確定拠出年金業務におけるレコードキーパーと資産管理機関のシステム間接続を担うDCPortでは、運用指図・取引報告の照合などの業務処理を提供している。

これらの、業務プロセスを重視した機能によって、既存システムへの影響を最小限にしながら、スムーズなシステム間接続をいち早く実現することができる。 ■

村上洋之（むらかみひろゆき）

資産管理システム事業部 副主任システムエンジニア

専門は金融関係のシステム設計・構築